蘇（よみが）える鷲尾雨工

直木賞作家の姿明らかに

昨年は町制施行二十周年でした。町では記念事業として、当町に生まれ、第二回の直木賞を受けながらも、現在忘れさられている小説家「鷲尾雨工」（一八九二～一九五一）を掘り起こそうと初の回顧展やシンポジウムを十一月に開催し、大きな反響を呼びました。

雨工にとって初の回顧展となる「鷲尾雨工展」は十一月十日(水)から十五日(月)まで、黒埼町公民館講堂で開催し、町内外から五百人近いかたが訪れました。会場には昭和十一年に直木賞を受賞した「吉野朝太平記」の原稿や初版本をはじめ、直木賞の正賞の時計や愛用の机や辞書などの遺品、六十冊ほどある著作、写真や書、小中大学時代の卒業証書や答案、大量の原稿や交流のあった西脇順三郎や菊池寛、曾津八一などの書や絵、書簡など約三百点を展示しました。

十四日(日)に改善センターで開いたシンポジウム「雨工がいた」では、文芸評論家で日本ペンクラブ会長の尾崎秀樹氏、昨年「鷲尾雨工の生涯」を著した塩浦林也氏の講演があり、また御遺族の鷲尾サダさんや生前の雨工を知る六人の方から、思い出を会場につめかけた百三十人の中で披露していただきました。

雨工の生まれた鷲尾家は黒鳥で三代続いた医者の家柄でした。しかし、雨工が生まれる一年前、祖父で評判の医師だった文貞が、実家の山際七司のために多額の債務を負って七～八町歩あった田地を売り払い、また、雨工誕生の明治二十五年とその翌年には、祖父と父の亮が病死したのです。苦難の人生を暗示するような生の享け方でした。

板井の萩野家から入籍した養父の練平が古風な祖母のカネによって離縁された後、明治二十八年には生家の焼失にも遭い、一家は小千谷市山谷の中野家（母・イシの実家）に身を寄せることになりました。

ふるさと黒埼に懐しさと誇り

雨工の目を文学や歴史に向けさせたのは祖母でした。困難に耐えて鷲尾家を再興する気概を持たせようと「南総里見八犬伝」や英雄の逸話を語り聞かせたのです。やがて雨工は小千谷中学の頃（ころ）には神童と言われるまでになり、特に歴史は先生はだしでした。

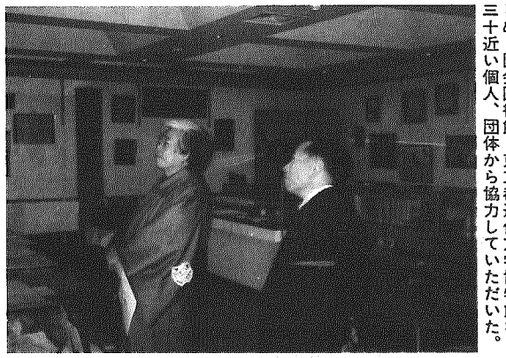
雨工は中学三年から作家志望でしたが、周囲は鷲尾家再興のため医者か外交官になるよう勧めました。それで雨工は初志を貫くため、一高入試を二度も故意に不合格として早稲田に入ったのです。同級には直木三十五をはじめ、保高徳蔵などそうそうたる人々がいました。

大学卒業後の雨工は、化粧品会社に入って商品のキャッチフレーズを作る仕事をしましたが性に合わず、直木三十五の誘いを受けて冬夏社を作りました。しかしこれも関東大震災によって倒産しました。一年半の小千谷生活の後に直木の活躍に刺激されて再上京し、おでん屋や保険の勧誘をやりながら極貧に耐えて、ついに昭和十一年、第二回の直木賞を受賞したのです。

この受賞までの長い不遇時代、雨工の心を支えていたのは、生家が常に医師として村人の役に立ち、鷲尾本家も蒲原平野の治水に努めた家柄だ、ということでした。雨工は、自分もいつかはそのように世の役に立ちたい、と考えていたのです。雨工にとっての黒埼町は、大きな誇りと懐かしさを感じる故郷だったのです。

高校教諭 **塩浦 林也**

基調講演（要旨）



雨工展をみる尾崎氏と塩浦氏（右）。鷲尾家をはじめ、国会図書館、東京都近代文学博物館など三十近い個人、団体から協力していただいた。

鷲尾雨工

黒埼で生まれ小千谷で育つ。早大卒業後、苦労の末、歴史小説家に。代表作に吉野朝太平記、織田信長、日本剣豪伝（いずれも富士見文庫）など。

回顧展・シンポジウム

作家鷲尾雨工の歩みについて振り返ってみると、代表作は第二回の直木賞を受けた「吉野朝太平記」という事になります。これは六巻本で、第二巻が刊行された時に菊池寛は、「この人（雨工の事）は直木三十五の旧友で、描写には直木ほど精彩がないが、構想は直木よりもしっかりしている。僕の想像では直木は青年時代、この人の歴史趣味の影響を受けて、遅ればせながら歴史小説を書き始めた感じである」と批評しており、直木との関係について、ちゃんと読み取っていると言えます。

雨工が直木を知ったのは早稲田大学で、同級生とほとんど話さなかった直木は雨工が唯一の友人でした。二人は兄弟のような仲でしたが、出版事業に手を出したため不幸な確執が生まれ、大猿の仲になりました。雨工は様々な状況から一度田舎に戻り、再び上京し、おでん屋でわずかに孤高をしのぐのですが、ここで楽をしてしまったら、雨工という歴史作家は生まれなかったに違いありません。雨工の人間としての偉さは、そういう苦境にもメゲず、直木と手を切りながらも、その作家的力量を正当に認め、それに刺激されて再び創作の筆を取るという所にあったと思います。直木への反発もあったかもしれませんが、それだけでは「吉野朝太平記」は生まれるはずはなく、直木の出世作「南国太平記」を一読して触発される部分があった。これが吉野朝太平記に凝縮していったと言っていいと思います。

吉野朝太平記の第一巻は楠（くすのき）正成（まさしげ）が討死して十二年経った時期から筆を起こし、正行（まさつら）、正儀（まさのり）の性格的な対立を描きながら四條畷の合戦までをたどり、二巻では正儀の策謀で高師直が滅びるまでがまとめています。直木賞の対象とされたのはこの二巻までで、六巻全部が刊行されるのは、受賞後の事でこれはちょっと異例な事です。

この正儀は楠正成の三男で兄二人が戦死した後、一族の長として河内に南朝方の軍事拠点を形作りますが、その評価は「南朝の武士を統括する立場にありながらも一度は北朝につくなど節操がない」と後世の史家たちからは厳しいものがありました。この正儀を取り上げる事は、批判的な存在だっただけに決意のいる事だったと思われます。

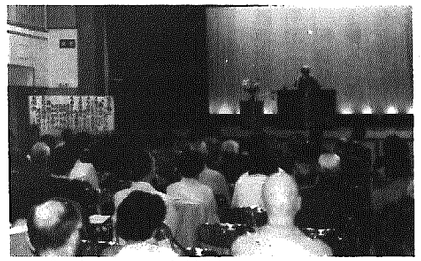
実は尾崎家は楠正儀に絡んでいて、二番目の兄がゾルゲ事件で捕まったとき、正儀の末裔だから当然・・・のようなことを言われ、やりきれない気持ちになりました。その際、この「吉野朝太平記」を読み、慰められる思いがありました。

文芸評論家 **尾崎 秀樹**

記念講演（要旨）

雨工の作品の特色は、その当時の歴史資料を確実に踏まえながらも作品を単なる史実に終わらせないで、その中に物語性を盛り込んで、同時に登場する人物を現代に生きる人に共感できるように心理的側面をちゃんととらえている点にあります。会話の部分などは非常に現代的と言えます。

雨工は「鎧（よろい）物の作家」と俗に言われますが、歴史の流れや諸事実は現在においても一つの指針となる、という思いを意図しており、雨工の作品は歴史文学の本道を行くものです。吉川英治は「歴史を以（もち）て現代を撃つ」と言っていますが、雨工がもう少し長く生きていれば壮大なスケールの作品を書き、歴史を通して現代をさらに〝撃って〟いたのかもしれません。



シンポジウムには130人が参加

鷲尾サダさん
（東京都新宿区・雨工の養女）…雨工は黒埼を誇りに思い、また借財から救ってくれた関矢孫一さんには大変感謝していました。

保坂新一郎さん
（小千谷市・雨工の妻倫子と乳兄弟）…雨工さんは私の事も兄弟のようにしてくれて、あちこち連れて行ってくれました。

高橋キヨさん
（小千谷市・昭和9年ごろ鷲尾家の世話をした。新一郎さんの妹）…昼は保険の外交、夜は文筆活動をしていました。

丸山和五郎さん
（黒埼町木場・昭和21年に木場で行われた雨工の講演会に参加）…木場が単独で一級河川から用水をとり入れる改良工事の完成記念に講演していただき、感動しました。

中野潤児・セツ御夫妻
（小千谷市・雨工のいとこ）…雨工は子ぼんのうで子供2人を早く亡くした事に深く悲しんでいました。

雨工を語る

雨工春秋をお分けします

雨工展の図録を兼ねて発刊した記念誌「雨工春秋」（A4判32ページ）を希望者に頒布します。教育委員会で受付ています。郵送希望の人は切手250円分を送ってください。黒埼町大野2843　黒埼町教育委員会へ。☎377-3101